

実践事例

(環境) 秦梨小学校 4年

秦梨の河川環境保護について考え、実践する子どもの育成

～「秦梨の水を知り、乙川の環境を守ろう」の実践を通して～

4月～3月(35時間)

1 はじめに

秦梨小学校は、自然豊かな環境に恵まれている。しかし、子どもたちは、4月にアユの放流を行うまで、乙川の水がとてもきれいで、貴重なものだという認識はなかった。

そこで、岡崎市環境部の行う環境教室とその後の調査活動を通して、水辺の環境の実態を調べ、考察し、環境保護の実践を行うことにした。

この活動を通し、秦梨の環境がいかに恵まれており、大切であるかということに気付き、調べて分かったことや考えたことをもとに、環境保護活動に取り組む子どもになって欲しいと考えた。

2 「秦梨の水を知り、乙川の環境を守ろう」の実践

(1) 実践の工夫・手立て

① 基礎・基本的なこと

図鑑やインターネットを使って調べ、分かったことや思ったことを学習カードにまとめることを繰り返し行う。

② 一人一人の考えを生かすこと

調べて分かったことや考えたことを発表し合い、情報を共有させる。その中で、自分だけでなく、家庭や地域などの広い視点を持った意見を取り上げるようにする。

③ 深めあい、広げること

自分たちが環境に与える影響や環境を守るために自分たちができることを話し合い、考える場面を設定する。また、学んだことを発信したり、実践したりする活動を取り入れるようにする。

(2) 実践の記録と考察

① 指標生物による水質調査

1回目の環境教室では、乙川とふるさとトープで指標生物の調査を行った(資料1)。見慣れない生き物を探し、水のきれいさを調べるということに子どもたちは興味を持って調査活動を行った。

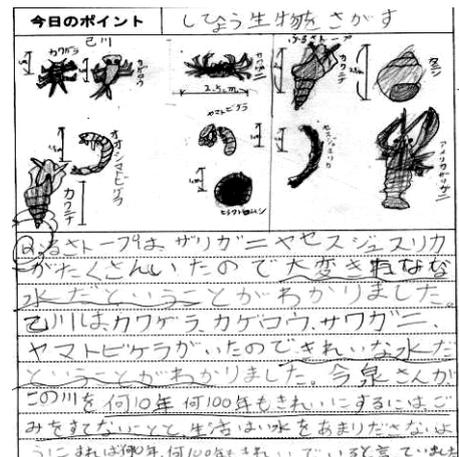
さらに自分たちで学校横の側溝でも調査を行うと、乙川はきれいで、側溝はすこし汚い、ふるさとトープはとても汚いということが分かった(資料2)。

③ CODパケットによる水質調査

2回目の環境教室では、乙川、清水弘法のわき水、ふるさとトープ、洗濯の水、みそ汁などについて、パケットでCOD値を調べた。水の汚れが数値で分かるので、子どもたちは積極的に調べた。乙川、清水弘法はCOD 1～4だったが、家庭から出る水は15～20000だった。



(資料1) 説明を聞く子ども



(資料2) 児童Aの記録

これをきっかけに、他の家庭から出る水についても、どれだけ汚れているのかを調べた。牛乳、中華スープなどは、COD 5000～140000と、自然界にある水に比べ、家庭から出る水が桁違いに汚く、子どもたちは驚いていた。

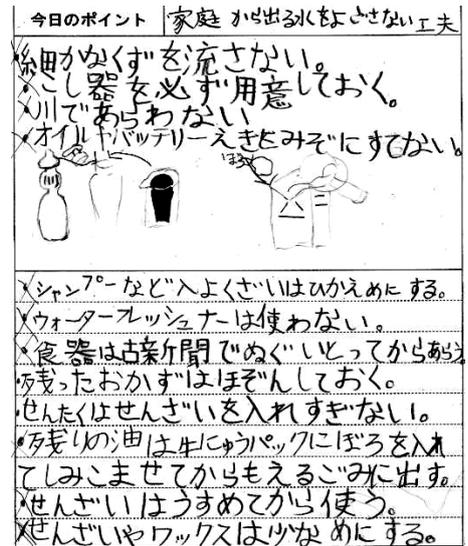
④ 乙川を守るために、自分たちにできること

自分たちにできることとして、家庭から出る水をできるだけ汚さないことが必要だと子どもたちは考えた。その工夫を本やインターネットで調べる、家族に聞くなどしてまとめた（資料3）。

さらに、乙川に捨てられたごみを拾う活動をするようになった。アユの放流のときにごみが落ちていることに気がついた子どもが、乙川のごみを拾おうと言ったことがきっかけである。探せば探すほど、多くの量と種類のごみが見つかり、子どもたちは驚きと怒りの感想を書いた。

⑤ 発信活動

自分たちにできることを考えていく中で、子どもたちは、家庭や地域の人たちに、自分たちが調べたこと、感じたこと、願っていることを伝えようと話し合った。そこで、乙川に関する新聞を作り、家庭や地域の人に配ることにした。パソコンを使って、書く内容を分担し、写真やグラフなどを入れて記事を書いた（資料4）。



（資料3）児童Dの記録



十一月二十二日に下水しよ理場を見に行きました。下水しよ理場は家庭から出る水をきれいにする場所です。杉田商店の道から出る水のCODは、何万、何十万です。でも、下水しよ理場から出る水は、CODが5でした。何十万の乙川は、1でした。何十万を5にしては、何万、何十と思いましたが、元の1にもいどせるように家庭から出る水を少しでもきれいにしようと思いましたが、みなさんも、ぜひ協力してください。（児童G）

しよ理場すげい！でも……

（資料4）児童Gの新聞記事

3 成果

子どもたちが課題に関心を持ち、意欲的に活動を行い、きれいな乙川を「守らなければならないもの」として認識したことが成果として挙げられる。

また、家庭排水の行方を調べていく中で、秦梨の自然が川の下流の地域の人たちの環境に影響を与えていることなど、広い視野で環境を考えることができるようになった。

4 おわりに

アユの放流から始まった今回の「水と環境」についての学習であったが、子どもたちは興味関心を持ち、意欲的に活動することができた。乙川のきれいな環境を守るために、今後も環境保護活動に関心を持ち、実践を継続していく子どもたちであってほしいと願っている。